

2020
日本民間放送連盟賞
最優秀

2020
文化庁芸術祭賞
優秀賞

2024
ギャラクシー賞
優秀賞

2024
調査報道大賞
奨励賞

2024
座・高円寺
トキエメンタリーフェスティバル
大賞

揺さぶられる正義

信じるのが先か、
疑うのが先か。

5.24 (日)
徳島でみれない映画
をみる会
5月特別例会

「揺さぶられっ子症候群」、多くの冤罪を生んだ“虐待”事件——
これは贖罪と覚悟の物語。

監督：上田大輔 プロデューサー：宮田穂希 撮影：平田拓之 編集：宮山慎司
音声：村本俊英 音楽：森本早織 監修効果：森原隆之 監音：中嶋泰成 製作：関西テレビ放送 配給：東風
2025年 日本 129分 DCP:キネマネット ©2025 トコフィルム

5月24日(日)①10:30 ②13:10 ③15:50 ④18:30 ●徳島市シビックセンターさくらホール



弁護士記者が長年の調査報道の末に描く、 唯一無二のドキュメンタリー



—— 土方宏史 (東洋テレビ「SBS」制作総指揮)

同業者がまだいることにホッとする。

白黒つけず迷いながら取材対象に向き合う

一層に飽きたかといえは吾に詰まるが、

でも、そんな人がいるから、テレビはやりくりで踏みこまれているのかもしれない。

上田さんは面白い記者だ。

冤罪や行政からの発表モノに従ってはいけいはいの、クレに踏み込め、裏面ながら権力の効率も悪い。儲からないから現報率も取れない。

だから会社からも嫌われている(たぶん)。

人が生まれ、育つことの重みに涙した。

—— 井上由美子 (脚本家)

フィクションではとりつけない頂。

上田君の関心だけは、

引き裂かれた家族の姿を他人ごとでは終わらせない。

自分も加担しているつもりで思いつつ、前にならなっている現状に、

借る側にも見よう側にもそれぞれの正義があり、

両者の狭間でつかみ上げる当事者の肉声に、丁寧に描き上げた

記者の真摯さが確かに心への正義だった。

—— 一種(チノ小説家)

無実の人を救う弁護士を志すも、有罪率99.8%の刑事司法の現実と絶望し、企業内弁護士として関西テレビに入社した上田大輔。しかし、一度は背を向けた刑事司法の問題に向き合おうと記者になった。上田が記者3年目から取材を始めた「揺さぶられっ子症候群(Shaken Baby Syndrome)」。通称SBS。2010年代、赤ちゃんを描きぶつて虐待したと疑われ、親などが逮捕・起訴される事件が相次ぎ、マスコミも報じてきた。

SBSは子ども虐待対応のための厚労省のマニュアルや診断ガイドにも掲載され、幼き命を守るという強い使命感を持って診断にある医師たち。その一方で、刑事弁護士と法学研究者たちによる「SBS検証プロジェクト」が立ち上がった。チームは無実を訴える被告と家族たちに寄り添い、事故や病気の可能性を徹底的に調べていく。虐待をなくす正義と冤罪をなくす正義が

激しく衝突し合っていた。やがて、無罪判決が続出する前代未聞の事態が巻き起こっていく。

実名、顔を晒され、センセーショナルに報じられる刑事事件。逮捕報道に比べ、その後の裁判の扱いは小さい。無罪となっても一度貼られた「犯人」のレッテルはネット空間から消え去ることなく、長期拘留によって奪われた時間も戻ってはいない。SBS事件の加害者とされた人や家族との対話を重ねた上田は、報じる側の暴力性を自覚しジャンルマに苛まれながらも、かれらの埋もれていた声を届け、司法とメディアのあり方を問う報道に挑む。そして、記者として何を信じるべきか、上田を最も揺さぶることになる人物と対峙することになる――。

自分しごとできない、と編み上げたこの映画は、懸望と覚悟の物語だ。



揺さぶられっ子症候群とは? (Shaken Baby Syndrome: SBS)

乳幼児の上半身を前後に激しく揺さぶることによって強い運動性の外力が加わり、脳の中身に損傷が生じる状態。脳出血、脳挫傷、硬膜下血、脳挫傷、硬膜下血が混ざれば、脳出血も発生する可能性がある。また診断されるようになった「SBS確証」。日本でSBSの症例が最初に紹介されたのは1996年代前半、2000年代後半からSBS確証の普及が広がり、2010年代に入ってSBS事件での逮捕、起訴が急増した。現在では、揺さぶり以外の原因(たまたま)も含む「虐待」による脳外傷、という用語が多く用いられるようになっている。



日々流れるニュースのその先を、私たちは知らない。

入会お申込

お名前

(男・女) 年齢(歳代)

ご住所 〒

電話番号